

知恵あるひとを訪ねて

全盲のソプラノ歌手、エッセイスト
塩谷靖子さん

北風より 太陽の心を 大切に しています



全盲のソプラノ歌手、塩谷靖子さん(73歳)は、子育てが一段落した後、音大出身者が多い声楽界に飛び込み、51歳から活躍するようになった女性です。そのダイナミックな人生を支える心の支柱とは――。

取材・文：清水麻子(編集部) 撮影：キッチンミノル

昭和の面影が残る東京北部。爽やかな風が吹く川べりで、自然を満喫しているのは、塩谷靖子さんです。日本歌曲の登竜門「音楽堂日本歌曲コンクール」に入選し、51歳でソプラノ歌手になった塩谷さん。今年で歌手生活は22年となります

た。

時々出演するコンサートの合間に、自然と触れ合う時間を大切にしています。風の音色を聞いたり、草花に語りかけたり……。気持ちがあらぐのだそうです。「幼い頃に住んでいた町には、美しい自

然がありました。私はまだ目が少し見えていて、露草は藍色に光り、砂浜には虹色に光る貝殻がたくさん落ちていました。夏の夜には、父が飛び交う蛍を捕まえては蚊帳の中に放ってくれました。きらきら光ってきれいでした」と、懐かしそう

に戦後の故郷の風景を振り返ります。

結婚し、幼い子ども2人を育てていた頃も、向かった先は、やっぱり近所の自然だったそう。「近くの川の土手にはヨモギが自生していて、子どもたちに取りもらっては持ち帰って、てんぷらにしています。苦味と香りが、たまらないんです」と、うれしそうです。

塩谷さんは、コンサートでも、こうした自然についてのお話を、歌と歌の間に挟んで観客を沸かせます。「目は見えなくても、まるですべて見えているかのように語るのが、塩谷さん流。みんな時を忘れ、幻想的な塩谷さんの世界に巻き込まれていくんです」と、コンサートを主催する音楽事務所の女性は話します。

見えないのに真実がある 美しい定理に魅せられて

8歳で先天性緑内障のため両目の視力を失った塩谷さんは、もともと音楽とは全く違う世界で活躍してきました。盲学校の高等部卒業後は鍼灸・マッサージの資格を取得。しかしその後、両親の勧めもあって東京女子大学の数理学科に進んでいます。専攻したのは抽象代数学という「群」などの抽象的な集合についてです。塩谷さんは高等部3年のとき、「 e の x 乗は微分しても e の x 乗である」という美しい定理に出合い、数学の魅力を垣

他の入選者は音大出身の 自分より若い人ばかり。 上には上がいるっことを 実感しました。

間見たとのこと。「 e は現実の世界では見ることがない数です。でも、数学の世界では、真実がそこに存在し、それが実生活にも役立てられています。その美しさに魅かれました」

フォートランというプログラミング言語を用いて、数理解析なども行っていたといいます。その経験を生かし、大学卒業後は、視覚障害者プログラマーのパイオニアとして活躍します。

声楽を学び始めたのは、子育てが一段落した42歳のとき。2人の子どもたちが通う中学校のPTAコーラスで声を褒められ、知人とサロンコンサートを開いたところ、偶然客席にいた音大の先生から、本格的に学ぶことを勧められました。

「当初はお茶やお花を習う程度の軽い気持ちでした。でも続けているうちに、習

い事ではすまされない、という気になっていった」と。とはいっても、家庭を守りながらの声楽です。歩みは、ゆっくり、一歩ずつでした。それでも、できないことを、できるようにするための努力だけは惜しみませんでした。

そんなとき、知人から「奏楽堂日本歌曲コンクール」のことを聞き、思い切っ

た由緒ある舞台での開催です。しかし最初の挑戦では入選はかなわず、3年続けて2次予選までしか行けません。4年目、51歳のときに、ようやく本選出場を果たし入選しますが、上位入賞はできず、上には上がいることを実感しました。本選まで行った11人のうち、塩谷さん以外はすべて音大出身者。自分より若い人たちがばかりでした。

塩谷さんは一歩先に歩みを進めようと、

今年4月に行われた東京・神楽坂でのコンサートでは、春の曲を集めて披露しました。



コンサートには、さまざまな観客が訪れます。一人一人と会話をする塩谷さん。

しおのや・のぶこ
1943(昭和18)年、鳥取県出身。東京教育大学附属盲学校(現・筑波大学附属視覚特別支援学校)を経て、東京女子大学文理学部数理学科卒業。日本初の全盲コンピューター・プログラマーとして、日本ユニパック(現・日本ユニシス)株式会社に勤務し、視覚障害者プログラマーの先駆けとなる。42歳のときに声楽を始め、95～97年には、「奏楽堂日本歌曲コンクール」に連続入選。99年「太陽カンツォーネ・コンコルソ」クラシック部門第1位。愛唱歌からクラシックまで幅広くコンサート活動を行う他、エッセイストとしても活動。著書に『寄り道人生で拾ったもの』(小学館刊)。

次なるクラシックのコンクールに向けて努力を重ねます。そして56歳のときに「太陽カンツォーネ・コンコロソ」のクラシック部門で優勝を果たします。

地道な努力は声楽にとどまらず、若い頃から書いてみたかったというエッセイにも及びます。20年ほど前、点字以外の手段で自分の気持ちを世の中に発信してみようと、視覚障害者用に音声や点字ソフトを組み込んだパソコンで文章を書き始めました。そして66歳のときには自伝を出版。今も自身のホームページで、日常の出来事を綴っています。

「なぜそんなにがんばるのですか?と問われることもあります。単純に、好きなことを、極めたいだけなんです。逆に苦手なことは、一切やりたくないって思ってしまう。例えば嫌いなスポーツは、絶対にやらない(笑)」。そう、マイペー
スで道を進めるのが塩谷さん流の夢のかなえ方なのです。

子どもと同じ扱いが人間の尊厳を排除する

2人の子どもが独立した後、3年前には、夫の治^{なほ}さんを病気で亡くし、一人暮らしが始まりました。治さんは、ハルメクでコラム連載を担当する福島^{ふくしま}智・東京大学教授の盲学校時代の恩師でもありました。



上 / ベランダの花に毎日、水をやります。「手で触れば、草花の姿を感じることができます」下 / スーパーマーケットで店員さんと。

好きなことを、極めたいだけ。逆に、苦手なことは、やりたくないんです。

一人暮らしをするようになった塩谷さん、外出時には行き先によっては人手を借りることもありますが、生活の基本は自力でやっています。

食料品の買い出しは「キャベツ、ウインナー、牛乳」などと、必要なものをパソコンに入力し、自分の携帯メールに転送します。その携帯を持ってスーパーマーケットに行き、入り口で店員さんをお呼びと、買い物を手助けしてくれます。「自力でも行うとはいえず、同時にいろいろな方の助けがあつてこそ、一人暮らしだと実感しています」

一方で、世の中の人の視覚障害者への思い込みに心を痛めることもあるそうです。

「歩いていると、『あらあら、困っちゃったわね、こっち、こっちよ』などと、まるで子どもを諭すように話しかけられることがあります。善意で道を誘導してくださっているのはわかるのですが、私は子どもではないので、腑に落ちなくて」。いくら善意であっても、「視覚障害者は子どもと同じ弱者」という思い込みは、人間の尊厳を排除するのに等しい。同じ視覚障害を抱える友人も、同様に感じて



この点字タイプライターとは、もう半世紀以上のつきあいです。ピアノの鍵盤を押すように、リズムカルにキーを打ちます。

いる人が多く、そんなときの受け答えをめぐってどうするかが話題になるそうです。塩谷さんは、こうした扱いを受けたときは、心の内の葛藤は見せず、にこっと笑顔を返すようにしているそう。

「イソップ童話に、『北風と太陽』という話がありますでしょう。北風と太陽が競争をし、北風は人間に風を吹き付けて服を脱がそうと苦労しますが、太陽が温かい態度で悠然と構えていると、人間は自分から服を脱いでくれる。冷たく厳しい態度より温かい言葉の方が、人はわかってくれることが多いですよ」

こうして、常に柔軟に前向きに道を切り開いていく塩谷さんの活動を知り、最近、さまざまな境遇の人から「諦めかけていた夢を始めることにしました」というお便りが届くようになりました。「一番うれしいことです」。塩谷さんは、満面の笑顔を見せて、そう語ります。

夏に開かれるコンサート

- ◎開演日：7月8日(土)
- ◎開演時間：13時20分～
- ◎会場：文京シビック小ホール(東京都文京区春日1-16-21)東京メトロ丸ノ内線・南北線後楽園駅直結
- ◎チケット：全席自由 2000円
- ◎問い合わせ：及川音楽事務所 電話03-3981-6052

コンサートに関するお知らせは随時、塩谷さんのホームページ(<http://www.nobuko-soprano.jp/>)で更新されます。